

「マザーグース」が歌う「この豚ちび助」の詩境

「マザーグースの唄」といえば、わが国では「ロンドン橋」の歌が比較的よく知られている。

ロンドン橋が落ちた　ロンドン橋が落ちた　なんで　こんど　架けるぞ　なんで　こんど　架けるぞ

で始まり、橋の架け替えの材料として、金、銀、鉄、鋼鉄、材木、粘土などが品定めされ、結局、石で架け替えるのがもつとも確実という結論に達する歌である。歌といっても、実は「わらべ歌」——恐るべきジョンブルスピリットに直面する思いなのである。「マザーグースの唄」に身も心も虜にされた、文字通りのマザーグース信者によると、このわらべ歌は「英国流の三つ子の魂」——いいかえると、童謡による哲学教育だといふのだが、そこまで深く思い入れをしなくても、たとえば「この豚ちび助」と題する一編は

♪一　このぶた　ちびすけ　市場へまいった　二　このぶた　ちびすけ　おるす番
でござる　三　このぶた　ちびすけ　牛肉あぶった　四　このぶた　ちびすけ
なあんにも持たなんだ　五　このぶた　ちびすけ　ういういうい



いっしょにおうちへ よいこらしよ

(北原白秋訳)

と、詩的、哲学的、叙情的、生活的、そしてメルヘンチックと、複雑、多重的なムードを漂わせている。というのも、このマザーグースの唄は、中世らしい英国の「庶民」のあいだで歌い継がれてきたわらべ歌を集大成したもので、てっとり早くいえば英国創世らしいのジョンブル魂が「機知と軽快味」をもなったメロディーとなつて結晶しているのである。わが国でも、かつて子供たちは、小さな手の指をひとつずつ突つ

きながら「ひとつとせ、人もうらやむお殿さま」などと歌つた。マザーグースの唄では、つぎのようになる。

△みんなして森へ▽

ひとつとせ このブタ申す みんなして森へ

ふたつとせ このブタ申す なにしに森へ

みっつとせ このブタ申す お母さんにあいに

よっつとせ このブタ申す そしてどうするの

いっつとせ このブタ申す かじりついて

キッスしよ キッスしよ

まぎしく、いちごミルクの詩境といえよう。